論　壇

新生ロシアにおけるツーリズムの現状

―国際観光の潜在的可能性について―

A Report on New Forms of Russian Tourism: Examining its Potentiality

小林　天心*
KOBAYASHI, Tenshin

2年ほど前（2010年），日本で「オーケストラ！」というフランス映画が封切になった。共産主義から資本主義に移行中のロシアを，皮肉たっぷりに，そして温かく，しかもユーモアに包んで描き出した佳作である。国の資産を横取りしてのし上がった，オリガルヒと呼ばれる成金たち。落ちぶれてしまったかつてのエリート。いまなお偏見や差別とたたかわねばならないユダヤ人，ロマ人。共産主義時代に対するノスタルジーを，まだまだ十分に感じている人たちもいっぱいいる。不十分な公共交通機関。ラーゲリの記憶。引き裂かれてしまった家族。ロシアの文化や歴史に対するプライド。そういったさまざまな諸事情を織り込みながら，解散させられてしまったかつての名門オーケストラが，再編成されてゆくストーリーだ。ドタバタ喜劇の要素もいっぱい，モスクワとパリいう現代の二つの大都会を舞台に物語が展開する。かつて西と東に分かれていた世界。きわめて短期間に大きく変容するロシアの今日的な姿が，政治と文化の両面から鮮やかに描き出される。あるていど歴史的背景が頭に入っていないと筋が追い切れないほど，物語のテンポは小気味よい。そして何より秀逸だったのが，全編に流れていたチャイコフスキーだ。とくに終盤のヴァイオリン・コンチェルト，古くから耳に馴染んでいる曲が，まるでみずみずしい新曲のように身体中に浸みとおってくる。ついでながら，ソロのヴァイオリニストを演じた，メラニー・ロランのしぐさ，身のこなし。そのまなざしにため息をはき出した人も多かったにちがいない。洗練された知性と気品。少女と女のあわいを，まばゆいばかりに演じきって感動的である。

現代ロシアのツーリズムを探る

といったぐあいに長々と映画の中身を紹介したのは，2012年10月下旬，初めてロシアに行く機会があり，そのとき感じたことがあまりにこの映画と重なったからである。それより2年前，旧ソ連のなかにあったウクライナとアゼルバイジャンを訪れたが，ロシアに足を運んだのは今回が初めて

＊本学経営学部教授

だった。まわった都市は３カ所。モスクワと，かつてスターリングラードという名前だったボルゴグラード，それに黒海に面した南のクラスノダールという地域である。そして各地を回った印象，会った人々，なかんずくモスクワでのそれが，冒頭紹介した映画の，さまざまなシーンを彷彿とさせてくれるものが多かった。この映画が描き出した状況が，現在のロシアでもほぼそのまま続行中であるといっても大げさではない。それほど「オーケストラ！」という映画は，現代ロシアの風潮をそれなりに，核心を衝いて描き出していた。

今回のロシア行は，日本センターというモスクワにある日本大使館経済部の下部組織による招聘に応じた。日本センターはその事務所をロシア内６カ所においていて，ロシアと日本の経済関係を促進させるための，NPO に近い活動を行っている。その日本センターが今回，ロシア各地における観光振興をテーマとしたセミナーを開催した。各地の観光行政にかかわる人たちや観光業者，この分野に興味を持つ学生たちが対象である。国際観光の現状，観光による地域の振興，対日インバウンドやアウトバウンド，エコツーリズムなどが主なテーマ，それへの講師としての参加である。各地とも，１日の中で２時間のセッションを３回という長丁場だったが，質疑応答などもはなはだ活発に行われて，けっこう面白い体験をさせてもらった。

ロシアにおける観光の現状は，ある意味で日本に似ているといえなくもない。共産主義時代のソ連では，観光誘致などという雰囲気はみじんもなかった。暗い，冷たい，ぶっきらぼうな，まずい，こわい，といったネガティブな形容詞が，ソ連旅行経験者自身からもそうでない人たちからも，たちどころに語られたものである。共産主義下のソ連では，いくら与えられた仕事などに努力したところで，それが個人的に報いられることがない。そんな状況が70年続いたあげく，人々は訪れる人に対しても無気力無関心になった。旅行者など，面倒以外の何物でもなかったであろう。そもそもサービスとかホスピタリティなどという概念が存在しなかった。国営企業の従業員たちは一様に「泊めてやる，食わせてやる」という態度に終始したし，観光客・外来者などは，すべからく「監視」の対象でしかなかった，というのが実態ではなかったか。

しかしソ連が崩壊してもはや20年，ロシア経済も石油や地下資源依存ばかりではすまなくなってきた。日本の45倍という国土の有効活用を図るうえでは，観光というビジネスについても考えざるを得ない。投資が少なくてリターンが大きく期待できる分野でもありそう，というわけである。

モスクワ・シェレメチェボ国際空港

日本におけるツーリズムの停滞

日本において観光が国によって叫ばれ始め，ようやく10年である。モノづくり，貿易立国，産業立国，高度経済成長などという掛け声のなかには，観光という事象は全く含まれていなかった。むしろ観光などは「後進国のしがない外貨稼ぎ」として差別，疎外されていた雰囲気さえあったであろう。事実，観光立国推進基本法や観光庁までつくられた現時点においても，国が観光庁にかける予

算は年間120億円，たったジェット戦闘機一機分にも満たない。ちなみにハリウッド映画一本，たとえば「スパイダーマン３」のワールドキャンペーンにかけた予算がおよそ１億2000万ドル（フレデリック・マルテル『メインストリーム』岩波書店）。いっぽう，対外的観光促進を担う日本政府観光局の予算は，年々数パーセント削られつづけたあげく，販売促進予算はおろか，今や人件費もろくに計上しにくいほどのありさまである。日本国としての観光販売促進など，たんなるかけ声以外は何もやっていないというのが，正直な実態なのだ。

つまり少ない予算で大きなリターンが期待できる分野であるにもかかわらず，昔ながらの観光というあまり芳しくないイメージが払拭できないまま，日本のツーリズムはインバウンドもアウトバウンドも，あるいは国内観光も迷走を続けている。もちろん政治主導の観光振興策など，まったく期待できない状況に追い込まれてしまった。

いうならロシアにおいても日本においても，観光はまだまだ新しい概念に過ぎない。とくに近代のビジネスという分野においては，その重要性や大きな可能性が十分に理解され，広く国民に共有されているとは言いにくい。ホスピタリティ産業の成長と洗練は前途遼遠というのが正直なところだろう。国際観光は日本もロシアもまだ始まったばかりである。ぼんやりしていては国際間の熾烈な観光競争に，さらなる遅れをとってしまいかねない。そんな状況から，日本センターも対ロシア関係強化の一環として，観光を持ち出したものと考えてよさそうである。あるいは何か目新しいことをと見回してみたら，たまたま観光に目が行った，というような経緯であったのかもしれない。

ここではそんな今日のロシア観光事情につき，わずか10日間で見たことと感じたことを報告しておきたい。なにぶんロシアの訪問は初めてだし，ロシア語に関してもキリル文字もまったく知識がない。全日程をとおし通訳を務めてくれたダリアが居なかったら，すべてに手も足も出なかった，というのが正直なところである。ダリア・ポタポワは中学まで日本で育った。メールのサインに「ダリ子」と書いてくる。まったく流暢な日本語，もちろんロシア語も同様なのだろうが，こちらには見当がつかない。やわらかな感性を持った，モスクワ大学大学院の才媛はまだ20代前半である。当稿の内容は彼女とのやりとりに負うところが少なくない。

というわけでまるで文盲状態のロシア旅行記となった。不十分なことや思い違いなどもあるにちがいない。いってみればシロウトのロシア見聞録である。

モスクワ市内のおみやげ屋台に立つ女性

ロシアというあたらしい国

ロシアの国土は1707万平方キロ，アメリカの1.6倍もある。国内で９時間もの時差というだけでは，なかなかその大きさを実感することが難しいが，南米大陸よりやや小さめである。しかし大まかにはモスクワを中心とする西部ロシアと，ウラジオストックやハバロフスクを中心とする東部太平洋方面に人口は集中している。これだけ大きな国にありながら，人口は日本の1.1倍，ざっと

１億4300万人ほど。東西の間には気の遠くなるようなシベリアの大地が広がっている。空からの眺めはどこまで行っても人跡未踏とも思われるタイガ，針葉樹林帯で覆われていて，北方カナダのそれに良く似ているのかもしれない。モスクワといえども，一歩郊外に出ればどこまでも白樺や針葉樹の林が続いているかのように感じられるのだ。まるで無尽蔵の自然があって，多少の人間の跋扈など何ほどでもないとさえ思わされてしまう。それだけに，目に見えないところでの自然破壊はスケールが大きいのだと，モスクワである人が語ってくれた。

ソ連崩壊直前，1990年のソ連人口は２億9000万人ほどだった。たくさんの国がソ連邦から離脱し，現在あるロシア連邦の広さは４分の３に，人口は，当時のほぼ半分になった。最大の都市はもちろんモスクワ，人口はおよそ1100万人。ちなみに第２の都市がサンクトペテルブルグ，人口は約500万人。いっぽうのウラジオストックやハバロフスクは，ようやく人口60万人といったレベルにある。

ロシアという名称はルーシのギリシャ語読みだという。1703年，ピョートル大帝は自らをロシア皇帝と名乗り，現在のサンクトペテルブルグに首都を置いた。旧ソ連の版図で言うとバルト海に近い北東部がルーシ，現在のベラルーシにその名をとどめている。この地方の人々は北欧ノルマンの影響も強く，金髪碧眼は珍しくない。ルーシの中心は９～13世紀，現在のウクライナ，キエフだった。13世紀に一帯はモンゴルに征服されキプチャク・ハン国の支配下に置かれるが，15世紀になるとルーシ諸公のひとりモスクワ公がモスクワ大公国を率いて蒙古支配からの離脱に成功，やがて16世紀になるとイワン雷帝がその領土をシベリア方面にまで拡大する。1613年には大貴族と農奴制を特徴とするロマノフ王朝が成立。ちょうど日本では江戸時代が始まった頃である。1728年にはロシアの東進はベーリング海に達し，19世紀には海峡を越え，さらにその先アラスカへの植民まで行った。

1853年といえば日本にペリーがやってきた年だが，ロシアは英仏とクリミア戦争を戦って敗け，その財政難から1867年に，アラスカをたった720万ドルでアメリカに売却した。アラスカの広さは日本の４倍もある。これを購入したアメリカ国務長官の名前から，「スワードの冷蔵庫」と揶揄されたという。その後のゴールドラッシュや石油資源をみるだけでも，これがどんなにおトクな買い物だったかわかる。スワードの先見性にアメリカ国民は感謝しているだろうか。日本が明治維新で大騒ぎだったころのことだ。たった数粒の岩礁「尖閣列島」をめぐる日中の大騒動をみるにつけても，１～２世紀前の帝国主義時代における領土の売り買いは，ごくごく鷹揚なものである。

ロシア革命のあと1922年にレーニンは首都をモスクワに移した。共産主義時代の70年間を経て，1991年にソ連は新生ロシア連邦に代わり，大きな変化と苦労を重ねながら現在に至っている。日本でいうところの県，府，都に相当する，83の州，地方，共和国によって連邦が形成されている。

モスクワ市内赤の広場近くの大通り

モスクワ空港に雪が舞った

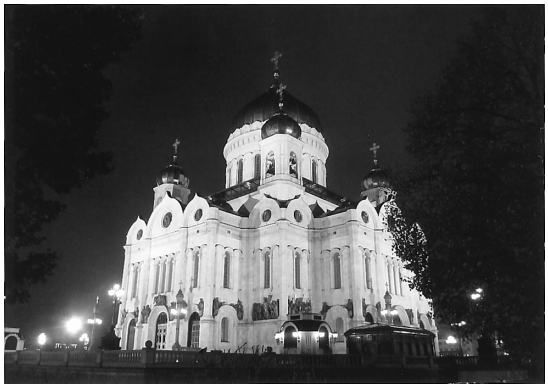
成田からのアエロフロートは，最新のエアバスA320-200だった。かつての悪名高かったイリューシンではない。座席の背にあるスクリーンには“Discover the Beautiful Russia”というキャッチフレーズが浮き上がり「Endless forest, Crystal clear lakes, Picturesque landscape, Huge mountains, Discover the beautiful Russia!」というコピーがつづく。機内のサービスでは，たまたまビジネスクラスということもあったにせよ，会話の時にキャビンアテンダントは膝をついて対応している。視線が相手を見下ろすことが無いようにというホスピの基本である。おそらく一昔前までのロシア旅行経験者に言わせれば，まるで天地がひっくり返ったような変化であろう。素朴な生真面目さが素直に伝わってくるスタッフのサービスは，よくある慇懃無礼とも無縁の，十分にこなれたものだった。

機内で出入国記録カードの記入をするよう指示を受けていたが，CA に尋ねると必要ないという。いぶかりながらも管理官に旅券を提出すると，それをかざした机上のマシンから，２連の ED カードが自動プリンタで打ち出されてきた。やせ形で色の白い，薄いブルーの目をした係官はにこりともせず旅券を戻し，「さよなら」とつぶやいた。その不似合なギャップがおかしくて記憶に残っている。手荷物検査もまったくフリーパスである。旅券も見ず，荷物にふれようともしない。いささか緊張のあてがはずれた。これがかつてのソ連かと思わずにはいられない。つい最近行った，観光先進国スイスにおける入国管理の劣悪な印象を思えば，まったく「優秀」そのものである。日本の出入国管理官のうち何人が，ロシアの旅券提示者に対し「ダスビダーニャ」といえるだろう。

シェレメチェボ空港からモスクワ市内への高速道路は片側６車線である。にもかかわらず終始渋滞が激しく，噂どおりたっぷり２時間かかった。しかし，わが日本の成田から都心への交通を思うとどうだろう。成田・羽田間の国際線・国内線乗り継ぎ所要時間が３時間半という，記録的な不便さを誇るトーキョーであれば，モスクワの空港行政や道路システムに文句をつけているヒマなどなさそうである。モスクワでは２日ほど前に初雪が降った。到着時にも粉雪が舞い，気温はマイナス２度。雲の切れ目をオレンジ色に染めて，夕陽が落ちて行くところだった。もはや空港でカメラを構えても，注意されることはない。

車窓からのモスクワの第一印象は「デカイなー」ということだった。建物が大きい。道が広い。道路わきの並木も一列ではなく「並林」に近いくらいの，あるいは長い公園と言ってもいいくらいのゆったりしたつくりだ。つい最近までアメリカと世界を二分した大国の首都，という貫禄を感じさせてくれるに十分なスケールである。

モスクワでのホテルは，日本センターが郊外にあるサリュートという３つ星クラスを用意してくれていた。ソ連時代からの古いホテルとかで，フロントスタッフも座ったまま。「いらっしゃいませ」も「今晩は」もない。エレベーターホールへの入口には，まるで仏頂面の警備員がふたり，ど



モスクワ救世主キリスト聖堂

うみてもテロ関係者捜査中といった雰囲気をみなぎらせながら突っ立っている。２年前のウクライナ，キエフのホテル従業員を思い出した。ホテルがこれでは先が思いやられる。古い３つ星ホテルだから悪いのか，５つ星ならどうだろうと，ロシア観光の将来を思いつつ，はなはだ気になった。

ホテルの１階に日本食のレストランがあった。モスクワ在住の日本人の間では人気の高いところらしい。おやじさんの顔つきを見ると日本人に似ているが，わずかに雰囲気が異なる。聞くところによれば彼の出身は朝鮮半島のあたりだという。旧ソ連時代，多くの人たちがあちこちに移住を余儀なくされた。ロシア人と一口に言っても，日本の状況とはかなり様相が異なる。ヨーロッパ系白人，スラブ，ペルシャ文化圏，中央アジア，中国・朝鮮など，まさに多民族国家である。ユダヤもいるし，「ドイツ人でしょう，どう見たって」という人も多いから，日本人的発想でなになに人といういい方はできない。民族自決，などというコトバがむかし語られていた。今でもそれを求め，多くの紛争が起きる。それに比べれば島国日本はやりやすい。でもこれから沖縄はどうなるだろうか。

スターリングラードと戦争の記憶

モスクワから南へ空路１時間半あまり，ヴォルガ川右岸に位置するボルゴグラードに着いた。人口はおよそ100万人の一大工業都市である。空港は意外に小さく，ホテルも少ない。観光に関してはまだまだこれからといったところである。この街は川沿いに70キロにもわたり長く伸びている。そして鉄鋼業，機械工業，化学，造船，運輸関係などの大工場が多くある。ここからさらに250キロほどヴォルガ川を下ればカスピ海だ。また1952年に開通したヴォルガとドン川とつなぐ運河によって，ボルゴグラードは黒海とも通じている。つまりボルゴグラードをとりまく水系は地中海から黒海，さらにカスピ海をわたりカザフスタン，トルクメニスタン，イランまでという大きなペルシャ文化圏をカバーしているのである。

> スターリングラードはヴォルガ川西岸に位置する欧州最大の都市だった。もともとの名前は，市を二分するヴォルガ川支流にちなんでツァリツァという名前だった。1942年，ヒトラーはこの街をヴォルガ流域の重要な橋頭堡と認識し，カスピ海の油田を奪取するために南に向かう部隊の足場としても不可欠と着目した。
>
> ――キャサリン・メリデール『イワンの戦争』白水社

というわけで1942年８月23日，600機にのぼるドイツ軍の空襲でスターリングラード攻防戦が開始された。最初の１昼夜で４万人が死亡した。両軍の兵力は合わせて100万人以上。このうち30万人を優に超える人命が，翌年１月までの５か月間に失われたと，メリデールは書いている。

スターリングラード攻防戦パノラマ博物館（ボルゴグラード）

人的損害は想像を絶した。爆撃に限らず絶え間なく響く轟音，土埃，炎，寒気，そして暗黒。

日々変化する状況が兵を疲弊させた。街の防衛に従事する者の補給は，ヴォルガの対岸を往復する船に全面的に依存していた。この補給路に支障が生じ始めると，兵士たちは戦場のハイエナと化した。死体をあさって長靴や銃，便箋までを手に入れた。腐った肉，焼けた鉄，汗のにおいが混濁して漂った。夜間に兵士が集まる地下壕には，新鮮な水はほとんどなかったので，洗い物などできるはずもなかった。前線ではいつもシラミが苦痛の種だった。服や手袋，寝具，兵士の伸び放題の髪に繁殖した。廃墟にはネズミや鳥もいたが，シラミと違って食べられるだけまだましだった。　――（同上）

そしてついに1943年１月，この歴史的攻防戦においてドイツ軍は敗北を喫し，９万人もの捕虜を出しつつ撤退した。スターリングラードの勝利は，50万人に上るソ連軍の犠牲を伴ったというが，圧倒的優勢と思われたさしものドイツ軍も，前年のモスクワ攻防戦につぐスターリングラードの敗戦で一転退潮に向かうことになる。別の記録によれば戦争の惨禍はいっそうすさまじい。

（モスクワ攻防戦では）両軍合わせると，最高700万人もの将兵がこの戦いに投入された。そのうち，戦死者，捕虜，行方不明者，病院に収容された重傷者は，合計250万人に達した。ドイツ側に比べソ連側の損失ははるかに甚大だった。ロシア側の軍事記録によれば戦死者，行方不明者，捕虜になった兵士合計95万8000人のソ連兵が「消えた」。ソ連兵の戦争捕虜の大半を，ドイツ軍は殺害した。93万8500人の戦傷者が病院に収容され，ソ連側の戦死者は合計189万6500人に上った。これに対しドイツ兵の犠牲者は，61万5000人だった。

一般には，1942年７月から翌年２月までのスターリングラードの戦いが，こうした戦闘の中では最も多くの血が流れた戦いだと考えられている。しかし実際にはこの戦いも，モスクワ攻防戦の規模に匹敵するものではなかった。スターリングラードでは360万人の将兵が戦場に駆り出され，両軍の犠牲者は91万2000人だった。

――アンドリュー・ナゴルスキ
『モスクワ攻防戦』作品社

日本の対中国戦争と太平洋戦争では，日本人だけでも300万人の命が失われたとされている。これは兵士と一般人を含めての数字である。しかしソ連のそれはさらに桁違いだ。ソ連軍の戦争による大きな被害は隠されてきたが，最近ようやくそうした記録が明らかにされつつある。上記の２冊とは別の角度から，ワシーリー・グロスマンによって書かれた『人生と運命』（みすず書房）という，スターリングラード攻防戦を背景とする大部の小説もある。なんという途方もないスケールの消耗であろう。独ソ戦のすさまじい現実は，まるで想像の範囲を超えている。『モスクワ攻防戦』にも『イワンの戦争』にも，多くの写真が使われているが，思わず画像がにじみそうになるもの。アタマではわかっていても「そんなバカな」とでも表現するしかない写真もいっぱいである。ノンフィクションであれ小説によるものであれ，その衝撃と驚愕は他に類を見ない。データに現れない個々のイワンたちの苦しみについては，このロシア戦後ドキュメンタリー文学の最高傑作とされる『人生と運命』など多くの文献・語りと，自分たちのつたない「想像力」によるしかない。語りの方はもはやほとんど聞くことが出来なくなりつつある。

もうひとつ，ヨーロッパの戦後を描いた歴史的名著から引用する。

戦争が起因となって1936年から1945年の間に死亡したヨーロッパ人の数は，およそ3650万人

とみられている。（これは戦争勃発時のフランスの全人口に等しい）――しかし何より衝撃的なのは，死者に占める非戦闘員の数である。少なくとも1900万人，つまり全死亡者数の半分以上なのだ。――軍人の損失が最大だったのはソ連で，武装した男・女兵士860万人が死んだと考えられている。――ソヴィエト軍の死者には，とりわけ多くの捕虜が含まれている。ドイツ軍は全戦闘期間を通じて約550万人のソヴィエト兵を捕虜としたが，その４分の３は1941年のソ連攻撃後７か月間でとらえられた。そのうち330万人はドイツ軍の収容所での飢餓や屋外遺棄や虐待で死んだ。

――トニー・ジャット『ヨーロッパ戦後史』みすず書房

フランスの全人口に等しい人数が，それぞれの死に方をしたのである。一瞬に，あるいはじわじわと。餓え，拷問，処刑。医師の助けも薬もない。親子も夫婦も兄弟も，おかまいなく引き裂かれた。それでもなお，あるいはだからこそか，人類は世界中いたるところで戦争と縁を切ることができない。おそらく人間は戦争が好きなのだ。

『イワンの戦争』のなかに，出征する兵士とその妻らしい若い農婦が，俯き加減に向き合う写真がある。鉄砲を担いだ兵士は見るからに頼りなげ，その肩に彼女の手が置かれている。それを裸足の子供たちがとりまき，不安げに見上げている。何気なく撮られたであろう１枚なだけに印象に残る。ヨーロッパの戦争で死んだ3650万人の一人ひとりに，統計数字に現れない，さまざまなストーリーがあったのだ。

祖国防衛戦争の記念碑

ボルゴグラード市内にある「スターリングラード攻防戦パノラマ博物館」は見ごたえのある博物館だった。円形の建物の中に，高さ16メートルの戦争絵巻が一周120メートルにもわたって描かれている。手前では実物どおりの塹壕，戦車が実戦中。白兵戦が行われ，戦車に体当たりする兵士がいる。動きこそないものの，さながら戦争ページェントがそこに再現されているかのごとくである。傷つき倒れた兵士たち。捕虜となってうなだれ，連行されてゆく一団。それらはいつの間にかうしろのスクリーンの絵画につながっている。陸空の激しい戦闘がそのまま具現化され，絵画と一体化した作品となった壮大な戦争芸術である。この作成には７人の画家が参加した。かれらのうち５人は，実際のこの戦争の体験者だったという。1985年にオープンしたこのパノラマを中心に博物館は拡大され，多くの記念品が展示されている。

若者を抱きかかえる女性像
（ママエフの丘・ボルゴグラード）

ボルゴグラードの街を見下ろす小高い丘をママエフの丘という。レーニン大通りから広い並木道をのぼってゆくと，池をはさんだ両側に戦闘の模様を刻み込んだ巨大な壁があり，やがて慰霊堂へとつながる。大きな彫刻の手が永遠の炎のたいまつを掲げている。ゆるやかなスロープになった回廊を一周すると，道はそのまま外に出て，戦死した兵士を抱きかかえる女性の像へと進んでゆく。勇ましい戦士たちの姿とは違い，女性の表情には

言いようのない悲しみと，諦めにも似た優しさが浮かんでいる。思わず目をつむった。その向こうにはロシア正教教会の美しい塔が，死者を弔うようにそびえ立っていた。そして参道はいよいよ高さ51メートルという「母なる祖国像」に近づくのだが，その巨大さがなかなか実感できない。大きな剣を振りかざした女神像の顔を仰ぎ見ると，彼女の表情はおろかな戦争を続ける人間そのものに対する，激しい怒りを現しているようにも見受けられるのであった。

ママエフの丘・母なる祖国像（ボルゴグラード）

大工業都市とこれからの観光政策

スターリングラードは1961年にボルゴグラードと改名された。広島市とは姉妹都市関係にある。双方の戦争の記憶が，ふたつの都市を結びつけた。ボルゴグラード州政府・国際関係部長のイーゴリ・キルノゾフ氏によれば，ソ連時代にはここへの観光客は年間250万人を超えていたという。しかし現在はおよそ70万人ほどである。ソ連時代にはここが国内有数の戦争記念史跡になっていたから，「教育旅行」が多かったらしい。しかしかつてのソ連はすでになく，戦後60年以上もたつ今となっては青少年の修学旅行は激減してきた。これから新しいボルゴグラードの観光政策を考えなくてはならない。

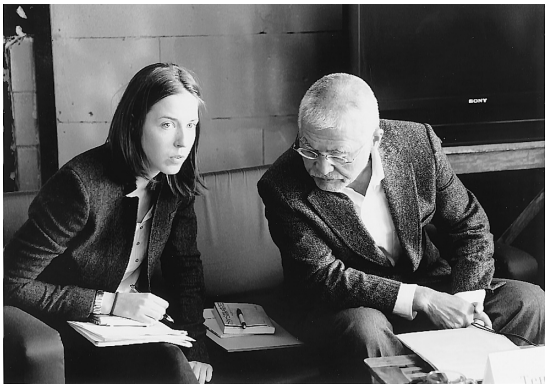
州政府の構想の中には，ヴォルガ川流域の再開発計画がある。川沿いに数キロのプロムナードをつくり，そのなかにホテルやスポーツ関連施設，公園などを整備するという。これに対し南にあるアゼルバイジャンの投資家たちが興味を示している。オイルブームに沸くアゼルバイジャンでは観光投資がきわめて盛んで，ここ数年間のうちに欧米の名だたる高級ホテル群が出そろった。かれらは今後のボルゴグラードの可能性に着目，これにかかわることで将来のビジネスにつなげようとしている。今まで鉄鋼業などの産業によって大きな近代工業都市となってきたボルゴグラードが，観光寄りにカジを切ろうというのは，何やら日本が観光立国宣言をしたのに似ている。うまく成功するだろうか。

キルノゾフ氏はエコツーリズムにも興味があるといった。どうやらエコといえば何となく新しくて商売にもなりそうと考えている気配を感じたから，ここのセミナーでは「エコツーリズムは商売になりにくい」とはっきり言った。

エコツーリズムというのはひとつの哲学である。観光か環境かという二者択一でもなく，環境をしっかり保全，魅力を高めることによって，観光客がおのずから訪れるようにする。「住んでよし，訪れてよし」という日本の標語は，それなりによくできている。そのうえで，経済効果をさらなる保全に回せるような観光のあり方をデザインする。そういうポジティブなサイクルを作り上げる基本がエコツーリズムである。サステーナブル・ツーリズムと同義。だからマスツーリズムをエコ化することが，エコツーリズム究極の目的であり，エコツーリズムは短期的儲けの手段にはなりにくい。

エコツアーはその思想を旅行商品の形にしたものだから，はなから「少人数，ゆっくり，静かな観光」のあり方を志向するのであるという，いささか紋切り型のプレゼンだった。

しかしながらこの街の将来像を描こうとすると，中心になるのはどうあってもヴォルガ川である。現在のヴォルガ川は工業都市の中心を流れる川として，相当な汚染に痛めつけられている。この川の流れをもとのきれいな状況に戻せるかどうかが，ボルゴグラードの観光の将来を大きく左右するだろう。街の郊外には豊かな田園が広がっている。この街がエコツーリズムを志向するのであれば，こうした田園地帯もその大きな財産である。たんに大型ホテルを作ればいいというものではない。観光における持続可能性とは何を指すのか，かつてものすごい汚染にさらされていた東京の隅田川を思い浮かべながら，あるいは水俣の記憶などをたどりつつ，セミナーではボルゴグラードの将来的観光ビジョンを話してみた。



通訳のダリア・ポタポワ（撮影：A・ロッシーヒン）

ボルゴグラードの秋

ボルゴグラードでは街の中央広場に面した同名のホテルで何回かの食事をとらせてもらった。「え…」というほど，何を食べてもうまいのである。これにはいささか感動した。たいがい，こうした場面で土地の担当者などとメシなど食べても，味などたいして記憶には残らない。適当なお世辞のやり取りに終始したりする。

外を歩いて見ると，ポプラ並木などの葉が黄色に色づき始めている。緯度からすると北イタリアのあたりと同じだから，まだそれほど寒くはない。日本の秋と同じくらいだった。

広場に面してとても美しいコンサートホールが建っている。円柱が何本かでゆるやかな三角屋根を支える正面の様式は，ギリシャ風だろうか。各地でこれを目にした。なかなか落ち着いたさまになっていて，のびやかな気分にさせられる。広場で一番目についたおおきな広告は「サムスン」だった。パナソニックもあったように思うが，目を引くという点で完全に負けている。モスクワにおいても同様だった。それにしても韓国企業の名称は現代（ひゅんだい）も三星（さむすん）も，韓国語の表音である。中国も同様。日本企業のブランドは，どちらかというと欧米系表音表記が多い気がする。この差がもし明確にあるとすると（ありそうな気がするが），ちょっとした文化論が成り立つかもしれない。

ボルゴグラードにつき日本で知る人は少ない。『地球の歩き方』ロシア編には4ページ紹介されているのみ。ぜんぶで600ページのガイドブックのなかに，スターリングラードの名前を見てはじめて「ああ」と気が付く人が多いのではないか。将来ヴォルガの流れの畔にあるここがどんな「観光地」として，諸外国に紹介されるようになるだろう。現時点ではそのデザインはまだ描かれていない。

まったくの余談。早朝ホテルをチェックアウトする際，ロビーのテレビをぼんやり眺めていたら，ショッピング番組で「排泄口洗浄型トイレ」の宣伝販売を，中年の男性が一生懸命やっていた。傍らでは女性がうんうんうなずいている。このあた

りのパターンはどこでも一緒らしい。ロシア滞在中，この型のトイレには出くわさなかった。まだ諸外国であまりお目にかかった記憶がない。こればかりはありがたい発明である。しかし迷惑至極でもある。これがない時は実にわびしい思いをしなくてはならない。「身体の記憶」というものはやっかいだ。しかし，イスラム圏ではこれが急速に普及してよさそうなものだと思うものの，これとて上下水道が完備し，電気が十分にあってこそ可能になるシステムである。欧米で一向に普及しないのはなぜだろう。いちいちシャワーというわけにも行くまい。これは比較文化論のテーマになるか，ならないか。

日本と同じ暖かさ，ロシアの食糧倉庫

ボルゴグラードからクラスノダールへは，陸路だと１日がかりになるというので，担当者が気を遣ってくれ，空路いったんモスクワに戻ってから再び２時間半弱の飛行という日程が組まれていた。陸路移動というほうが，のんびりこの地方を見られたのにと，あとから思ってみたが遅きに失した。着陸時に窓から下を眺めると，どこまでもよく耕された農地が広がっている。空からの耕作地の眺めはどこも魅力的だが，クラスノダールのそれはとくに美しかった。

クラスノダール市街

着陸してからも何気なく外の風景を眺めていると，機は滑走路のギリギリ端まで進んでから止まった。なんだか雰囲気がおかしい。保安スーツの係員が機体の下までやってきて，翼の裏を見上げたりしている。やがて機が動きだしてターンすると，そこには消防車数台と救急車数台が赤ランプをくるくる回しながら停まっていた。保安スーツ要員がずらりと並び，一様にこちらを見つめている様子である。機はそのままターミナルまで進んで，どうということなく空港から出たのだが，先ほどの様子がいささか気になった。ところが翌朝になって担当者は，ニュースで昨日の飛行機のことが報じられたといった。コクピット内に配線ショートか何かの煙が充満したらしい。それで機長が緊急着陸の要請をだし，地上では万一に備えての待ち受け態勢をとっていたと。「こういうことがちゃんとニュースで報じられる国になったんだ」，というのがまずの感想である。50年近く飛行機に乗り続けて，初めての経験だったな，というのがふたつめ。機材はボーイング737だったかと思う。もうひとつは，70歳近くになってロシアで消えたというのも悪くなかったかというものだったが，日本センターの担当者に言ったら一蹴されてしまった。

クラスノダールはロシアでもいちばん南，黒海に面した州より大きな単位の「地方」と日本語に訳されているところである。クラスノダール市はその中心都市であり，南に行くとコーカサス山脈をはさみグルジア。2014年の冬季オリンピック開催地であるソチは，クラスノダール市からもっと南，グルジアとの国境ぎりぎりに位置する港町である。南フランスと同緯度というロケーションだから暖かい。日本と同じように四季があり，寒くて凍ったロシアとのイメージとはまったく異なっている。紅葉もまだ始まったばかり，東京より暖かい陽気だった。クラスノダールもボルゴグラー

ドも，もとはといえばロシア皇帝によって「南の守り」のために配された兵士たちがつくった町だという。日本でいうなら北海道の屯田兵，中国風にいうと「南蛮」に対する備えである。

クラスノダールは「ちいさなパリ」か

クラスノダール市の人口は120万人，町ができて210年だという。クラスノダール地方の面積は約７万平方キロというから，北海道より１割ほど小さい。全体の人口は528万人。ざっと考えて，広さ人口共に北海道よりやや小ぶりな地域を想定すればいい。クラスノダール市はさながら札幌に相当し，黒海沿岸からは150キロメートルほど内陸に入ったところに位置している。地方の商業の中心であり，農産物の集積地でもある。地方全体では運輸，農業・食料，黒海の漁業，金融などが主な産業だが，トップの方に観光も入っている。黒海沿岸に大きな港湾がいくつもあり，地中海やその外までも航路はつながるから国際港なのだ。それゆえ，海上運送業もこの地方の大きな産業になっている。

クラスノダールの気候が温暖なため，ここは「ロシアのフードバスケット」なのだと関係者は語ってくれた。小麦，米，コーン，シュガー・ビート，各種野菜，りんご，みかん。みかんは日本のものとほとんど同じ味がした。ワインも全ロシアの40％がここで生産されている。

現地のNPOに「カイゼン」という名称をつけ，日本式経営をこの地方に根付かせるのだ，と懸命になっているオーリガ・アンドレーエワさんが迎えてくれた。ロシアの新興財閥がバックにあり，彼女たちの活動を支援している。かつて大学の先生でもあったらしい彼女は，そうとうな日本オタクである。カイゼンはもとより，マンガ，アニメ，コスプレ，アキハバラ，オタクなどという単語が

クラスノダール地方リゾート・ツーリズム省の
エフゲニー・クデリア大臣

ひんぱんに彼女の口から出てくる。日本の旅館と温泉の大ファン，もちろんほぼ毎年日本にやって来るらしい。

彼女の先導でリゾート・ツーリズム省のエフゲニー・クデリア大臣のオフィスを訪問した。40代半ばかと思われる，快活な人柄である。彼が語ってくれたところによれば，黒海沿岸とその北のアゾフ海沿岸双方にわたり，クラスノダール地方は1200キロにも及ぶ海岸線をもっている。そしてこの一帯には多くの温泉があり，ビーチリゾートや健康リゾートとして国内最高の人気を誇っているということだった。６月から９月のあいだはロシア中から観光客が押し寄せてくる。それで観光産業はうるおい，料金もかなり高額である。ただし

モスクワ大学構内の並木通り

オンとオフのギャップがあまりに激しい。11～4月の半年間，施設を閉鎖してしまう観光業者も多い。観光業は農業などにくらべ利益がとりやすいし，同時に税収もいい。だからもっと中国などからも投資を呼び込みたいのだと熱弁だった。日本人を目の前に「中国から」とおかまいなしの口舌に，いまや世界経済の中で日本と中国のポジションは代わってしまったのだと，納得せざるを得ない一幕だった。

黒海沿岸はロシアのパラダイス

大臣にクラスノダールのキャッチフレーズを聞いてみたら，「ロシアのパラダイス」だと言いつつも，いささか面映ゆげ。日本とほぼ同じような四季があることからすれば，秋，冬，春という3シーズンを遊ばせたままのパラダイスはもったいない。かつてはカナダも同じだった。半世紀近く前，カナダのツアーを日本で売り始めたころ，カナダのホテルなどは半年閉めているところが少なくなかった。夏300ドル，冬50ドル，というような料金のところもあった。黒海沿岸でも，やり方次第でオフシーズンを消し込むことが可能であるに違いない。

また大臣はこともなげに，「ロシアの人たちは最近，黒海地方のピーク料金が高いからと，トルコや地中海方面に行く観光客も多い」と語った。別のところでは「黒海は高いばかりで質もサービスもよくない，だから黒海を避ける傾向があり，自分ももはや黒海方面には行かない」と明言した人がいる。これはかなり危険な兆候である。売り手市場に立って高飛車な商売をした観光地の没落は早い。かつてのソ連政府は，全国の労働者や子供たちを黒海沿岸のリゾート，サマーキャンプに誘導した。現在年間の観光客1200万人という，クラスノダール地方黒海沿岸の各リゾートは，その遺産で食べているようなものである。日本でいうならかつての熱海とか，日南海岸を思わせるストーリーではないか。

ロシアでは各地で英語の資料を見つけることも難しい。オール・ロシア語なのである。これは日本でもついこの間まで同じだったが，最近になって少しだけ変わってきた。クラスノダールでは1種類のみ，Feel Krasnodar Regionというパンフレットをもらった。それにはエスニック・ツーリズム，ワイン・ツーリズム，ヘルス・ツーリズム，レジャー・フォー・チルドレン，イベント・ツーリズムといったページが並んでいる。しかし，紹介されているシーズンは，もののみごとに6月から9月までである。一部に5月。これはいろいろセミナーで話すネタができたと思いながら，大臣室を辞去した。

「クラスノダールは小さなパリと呼ばれている」，という文言が上記のパンフレットに書いてあった。たしかに街の中央通りというべきクラースナヤ通りは美しい。古く大きな並木が枝を張り出し，ほぼ緑のトンネルをつくっている。通りに面した建物もロシア風というより西欧の，たとえばパリ，といって別に違和感がない雰囲気である。クラシックな建物，上品な色使い，広いプロムナードや，あちこちに緑いっぱいの公園がある。紅葉が始まっていて，歩いて一回りしたいと思わせる魅力ある街だった。モスクワの印象をひとことで言うなら「威信」だろう。それとの対比でクラスノダールを言うなら「親しみやすさ」であり居心地良さである。大臣室の秘書を除き，かつてのソ連的空気を感じさせた人は皆無だった。

クラスノダールのエコツーリズム

カイゼンのオーリガさんが，2日間の観光セミナーを準備していた。1日目はこちらが国際観光，

地域振興，エコツーリズムなどについて話す。２日目はクラスノダール州各地の観光業者数人とシンポジウムのようなことをやった。エコツーリズムをテーマとするディスカッションなども。「都市型のエコツーリズムはあるのか」「ワイン・ツーリズムをどうやって育ててゆくか」「自然環境を利用する場合の規制のしかた」「野外活動の最近の成功例」など。２日間とも朝から晩までのセッションである。こちらの話は通訳が入るから，どうしても集中が切れがちになる。そこで最近の東京を写し，お台場やスカイツリー，浅草の観音様の話を入れたり，京都の観光案内をしばらく入れたりする。小笠原のゼミ旅行のシーンを写しながら，ここの歴史を世界遺産とサステーナブル・ツーリズムに混ぜこんでしゃべったら，これがけっこうウケた。新聞の取材，テレビ局の取材なども入った。帰国後のオーリガさんからのメールによれば，一般からの反応や問い合わせがけっこう多かったらしい。

こちらから持ち出した話は，①まずは黒海沿岸リゾートのシーズナリティから。こんなにすばらしい地域をなぜ年間３分の１しかアピールしないのか。②売り手市場に寄りかかった強気の商売では長続きしない。競争相手は外国のリゾートであり，価格的妥当性にも疑問があるなど。ほうっておけば間違いなく２流リゾートになり下がるだろうし，もうその兆しは見えている。「今ある一人ひとりの顧客満足」こそすべての鍵だという話。③のポイントは「小さなパリ」というブランドについて。大きなパリがあってその流れで小さなパリでは，いつまでたっても２流３流から抜けられない。パリはパリ，こっちはこっちである。日本にも小京都やナニナニ富士がいくつもあるという話をしながら，独自のブランド構築が必要というスジ論である。④つぎに観光マーケティングにおけるプッシュ・プルの宣伝広報バランスと，インターネット関連の SNM（Social Network Marketing）を含めた Search／ Share の広告理論。⑤はクラスノダールの街歩き商品開発について。これに関しては，車の乗り入れ規制をすでにこの街が導入していることから，理解が得やすかった。⑥エコツーリズムは商売道具ではなく，マスツーリズムにサステーナブルな核を入れこむための哲学なのだという，毎度の持論を述べた。⑦として，観光における国際競争がそうとうに激化していること。日本のいささかなさけない状況や，UNWTO（国連世界観光機関）の世界市場拡大予測，航空機産業が今後20年間に，新旅客機３万機を世界の空に投入するという見通しを持っていることなど，かなり具体的数値を示しながらの解説。フロアからの反応は敏感で質問も多く，この地方のひとびとの観光に対する注目度が，ボルゴグラードよりそうとうに高いことを示していた。

クラスノダールで泊まったホテルもスタンダードクラスのこぶりなところだったが，フロントやレストランのサービスはとても気さくな笑顔の対応だった。クラスノダールからモスクワに戻る際，空港の太った女性警備員がこちらの旅券と顔をしげしげ見ながら，にこにこしている。どうしたの

高さ281メートルの尖塔をもつ
モスクワ大学の本館

かと聞いたら「日本人と，日本人の旅券を初めて見た」という。それはそれはと，こちらも手を差し出した。空港のセキュリティと握手をしたのはこれが初めてである。

壮大なスケールのモスクワ大学

モスクワの日本センターは，広大なモスクワ大学敷地内の一角にある。モスクワ大は1755年創立。世界有数の名門大学であり，現在の学生数は院生7000人を含め４万7000人。教授や講師陣が4000人という規模である。スターリン様式という高さ281メートルもの尖塔を有する中央の建物は，左右に400メートルも広く，教員あるいは留学生などのレジデント用ウィングもある。今回の訪ロのきっかけをつくってくれた，日本センター大橋正和さんの案内で構内を歩いて見たが，全体の貫禄というか伝統を感じさせるたたずまいは圧倒的だった。

学生たちの持つ雰囲気を日本のそれと比較するなら，「大人と子供」である。この違いはどこからくるのであろうかとしばし考えた。たぶん戦後日本の「大学大衆化」による総体的遊園地化と無縁ではなかろう。日本に大学が780もあり，まだ増え続けている。田中真紀子大臣が話題を提供した新設大学への認可問題提起は，プロセスの巧拙を抜きにすれば的を射たものだ。親も小中高校の教員も，さらには世間一般も，この問題を真面目に考えようとはしていない。

いっぽうでは大学大衆化に伴い，一部大学の中身を問わない「ブランド化」が進行している。偏差値云々がいわれるが，個々の学生を見ていると，本人の責任より高校までの教員や親の責任を深く感ずる。さらに大学の在り方や大学教員の無責任さをより強く感じることが多い。俗にいう三流大学というのは教員が三流なのであって，学生はそれに合わせさせられているにすぎないと，最近しみじみ感じている。モスクワ大学の重厚な建物や学生たちの顔つきを見ながら，そんなことまで考えてしまった。

モスクワ大学の学生食堂

モスクワ大学本館内にある書店の一角

それにしても大学キャンパスが持つ雰囲気は大切である。広大な林の中にあるかのごとき構内を歩きながら，内外のいろいろな大学のたたずまいを想った。学びの場，あるいは知的生産の場としての大学。少なくともモスクワ大学の学生は，日本の大半の大学生たちより恵まれている。まあ建物や敷地を一瞥しただけでこう考えさせられたのだから，それだけモスクワ大学はすごいのだ。

ロシアの国際観光政策について

私の受け入れ窓口であり，滞在中何くれとなくお世話になった日本センターの河原李奈さんに市内を一通り見せてもらったついでに，日本大使館に寄った。こちらもずいぶん大きな建物で，入り口の警備がただ事ならぬほどものものしい。ロシア兵がガードをがっちり固めているから聞いてみたら，ロシアに対価を払って派遣してもらっているのだそうである。大使館の観光担当は，国交省の海上保安庁から出向してきている内海雅雄さん，経済部所属の一等書記官だった。本人いわく，「自分の職責は本来観光とは相いれないものなのですが，国交省からすると観光は守備範囲ということなので」と，お門違いを任されて苦笑いといった按配である。

ロシアの観光政策につきたずねたところ，プーチン首相が最近「Visit Russia Campaign」を言い始めた。モスクワタイムズという新聞の，10月９日付「文化大臣が72時間以内の無査証措置を提案」という切り抜きを渡してくれた。韓国人へのロシア入国査証は，国境到着後の空港で発給されるところまできているという。日本との間ではまだまだそんな雰囲気はないらしい。ソチで行われる冬季五輪にそなえ，ロシアとEUの間では短期訪問者に対する相互の査証免除交渉が行われているようだ。しかしこれにはEU側が難色を示している。さながら日本と中国のあいだのそれと良く似ている。かつて日本も，アメリカから査証発給をしてもらう際，まるで差別ではと思われるような苦労をしていた。

内海さんからの情報によれば「とりあえずロシア政府は，2011～2018年実質７年間で，観光施設の建設を含め日本円換算でおよそ8600億円を投入すると言っている。実際に執行されるかどうかは不明ですが」ということだった。この話を翌日の観光セミナーで披露してみたら，受講者が異口同音に「たったそれだけ！」と声を上げた。

モスクワと欧州各都市との位置関係からすると，LCCの可能性がものすごく高そうですがと内海さんに水を向けると，「ロシアは鉄道国家で運輸の70％までが旅客も含めて鉄道によっている。航空行政は鉄道の政治力の抵抗が強く，一筋縄ではいかないようです」という答えだった。

いずれにせよ，日本とロシアの観光交流は低調，昨年度で日本から７万8000人，ロシアからは５万人というレベルである。隣国同士ということを考慮するなら，この10倍あっても少しもおかしくはない。その潜在的可能性は高く，お互い十分な魅力を持っている。国家間ベースによる観光交流計画が具体的な数値目標を含め，策定されてもよさそうなものだが，両国の政治や日本の国交省や観光庁を眺めていると，まったく望み薄というしかなさそうだ。ロシア文化省に連邦観光局があるのだが，こちらもインバウンド専門ながらなかなか日本までの視線は届いていないと，内海書記官は残念そうだった。

日本大使館の建物自体，まるでがらんどうと言っていいくらい広々としている。何でこんなに広いのかと聞いたら，「モスクワ在住日本人1500人を，いざとなったら収容しなければなりません」と大使館員が答えてくれた。なるほど，そういうことか。そういうことまでが考慮されているのかと不思議な感じがした。大使館によれば，12年10月現在のロシア在留日本人は全部で2450人，うちモスクワに1667人である。万一の場合って，警備のロシア兵は誰の命令で，どのようなアクションを取るのであろうか。

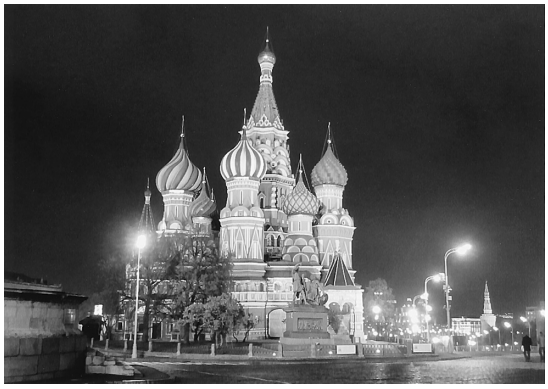
モスクワからのアウトバウンド

河原さんがモスクワにある日本の旅行会社ではHISが元気よく，いい仕事をしているからとわざわざ事務所に案内してくれた。HISディレクターの大室聡志さんはまだ30代前半である。最近ようやく仕事が軌道に乗り始めたところだという。ロシア支店の開設は2010年５月。モスクワ在住日本人やロシア人の日本向けアウトバウンドとインバウンド双方を取り扱っている。西部ロシア人向けに日本へのパッケージを販売するほか，最近では東部ロシア（ハバロフスク方面）から日本向けやアジア各地のリゾート向けランドパッケージの販売（ホールセール）も開始した。大室さんの言では，日本とロシア双方，旅行会社のスタッフにお互いの国に対する知識があまりにも不足しているのが最大のネックらしい。それと査証の発給。ロシアの観光客は長期滞在が多く，ホテルなどにもずいぶん高い金額を平気で支出する傾向がある。だからもし査証という壁が取り除かれたら，お互いの交流は一気に促進されるに違いないとのことだった。そういえば自分の査証発給にも２週間が必要だった。とくにロシア人に対する日本の査証発給が大変だと彼はこぼした。

ロシアでアウトバウンドを扱う会社は大手数社があり，アジアのビーチリゾート行のチャーターなどを積極的に行っている。ホテルも１か月単位で買い取る。とくにバリ島やモルディブなどの人気が高い。そういえばモスクワの大通り沿いにある大型の液晶パネル広告にも，タイやインドの政府観光局広告を頻繁に目にした。もちろん日本のそれは片鱗もない。

それからお互いに言葉の壁が高い。モスクワでさえ日本語のパンフレットはおろか，英語のものもめったにお目にかかれない。日本でもこれは同じだから文句は言えないのだが，モスクワを一人で歩き回るなんて，考えただけでも気が遠くなってしまうだろう。キリル文字がわからない。PECTOPAHと書いてあるのが，10日間いてようやくRESTAURANTのことだとわかった。街角にCTOПというサインが多い。STOP，いったん停止の標識だった。ロシア語アルファベットの基本いくつかを学習してこなかったこちらが悪い。しかし，せめて英語表示を何とかしてほしいという思いである。ただし上記のようにＰがＲ，ＣがＳ，ПがＰというような置き換えをいくつか覚えておくだけで，かなり事態はよくなる。若いうちであれば，こうしたことのクリアはそう難事ではなさそうだ。おそらくロシア人が日本に来て漢字などに接した場合の取り付く島の無さは，想像に難くない。

このことは日本各地でも同様，こころしてかからねばならない。と同時に，目下韓国語・中国語の表示が首都圏や地方都市でも目立ってきている。それ自体はいいとして，今後たとえばドイツ人とかタイ人がふえてきた場合，どんどん併記言語を増やしていけるのか，あるいはその必要があるのか。まったく五里霧中といったていたらくの中で，そんな感慨をもたされていた。



ポクロフスキー大聖堂（ワシリー寺院・モスクワ）

若い人々との観光ゼミナール

モスクワでのセミナー参加者は若い大学生などが多く，まるで大学院のゼミといった雰囲気だった。モスクワの市内を一回りした印象では，この国が持つ観光資源の凄さに圧倒される思いだったので，セミナー開始前は日本における観光の現状にかんがみ，とても偉そうなことは言えないという気さえしていたのである。だが始まってみると，参加者すべての日本に対する興味や関心，あるいはとても好意的なイメージをいだいていることが明らかになり，とてもやりやすかった。

どちらかといえば日本におけるロシアについてのイメージは，旧ソ連時代からあまり変化があったとは思えない。彼我のこの差はなんだろうと不思議なくらいである。「国際観光が世界の平和や経済に及ぼす影響」「地域振興とツーリズムあるいはサステーナブル・ツーリズムという考え方」「ロシアにおける国家イメージあるいはブランド構築の重要性」，それに「日本という島国における観光の現状と将来」などいろいろしゃべってみたが，質疑応答に時間が足りないくらい活発な反応だった。

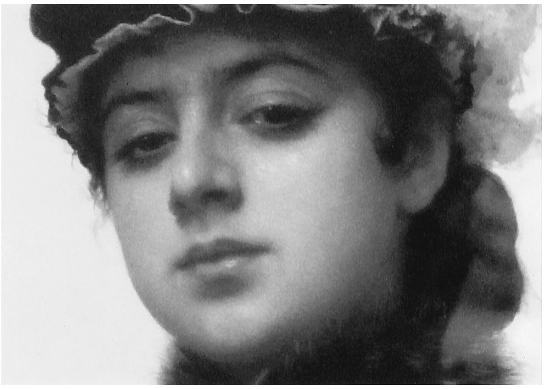
とくにロシアという国のもつイメージは重要である。ソ連時代のそれを早急に払拭しなくてはならない。クラスノダールに見るまでもなく，酷寒の大国とは異なる地域もずいぶん多い。どんなブランドイメージを打ち出せるだろうか。今後のロシアにおける観光立国政策上，しっかりしたビジョンに基づくブランド戦略はとてもたいせつなことなのだと，わが日本に目をつむりながら話をした。

ある観光研究者からは「宗教ツアーと日本のお遍路の違いをどう考えるか」などという質問があった。彼曰く，ヨーロッパ人がエルサレムに行くのは宗教ツアーである。ではサンチャゴ・デ・コンポステラへ行くのはどうか。現にハーベイ・カーケリングが『巡礼コメデイ旅日記』（みすず書房）をドイツで発行して以来，スペインへのドイツ人旅行者数が跳ね上がったというではないか。言いたいことはわかる。精神的なあるいは敬虔な宗教心か，知的好奇心によるものか。両者の間に截然とした区切りはつけにくい。そんなやりとりも面白かった。クラスノダールのオーリガさんではないが，日本の文化に対する興味の高さはそうとうなものである。モスクワにある日本料理店の数だって，東京にあるロシア料理店の数の比ではないと，関係者は語っていた。

赤の広場の夜はふけて

赤の広場からちょっと横丁に入ったあたり，モスクワ音楽院のまえにチャイコフスキーの銅像があったので，敬意を表した。トレチャコフ美術館を一回りして，おなじみの絵にたくさん出会ったが，ロシアの歴史や風俗民俗を知るうえでまたとない展示だと感じ入った。美術館や博物館はどこでも込み合うばかりで落ち着かない。ふだんは敬遠しているのだが，ここでは時間がもっとほしかった。小中学校の生徒らしい一団も多く見られて，先生かと思われる人の説明にまじめに聞き入っているのがほほえましい。ボリショイバレエもこの際だからと河原さんに切符を頼んだ。恥ずかしながらミーハーなのである。ここでも子供たちが親と一緒におとなしく鑑賞している姿が印象的だった。ロシアの芸術に対する姿勢がかなりの高さにあることがこんなところからも察せられて，いささかうらやましい。

そういえば赤の広場の印象を述べておかなくてはならない。ロシア語にいう赤というのは「美しい」という意味があるのだと，通訳のダリアが教



「見知らぬ女」トレチャコフ美術館（部分）

絵を見つめる少女と母親（トレチャコフ美術館）

「舟を曳く少年」トレチャコフ美術館（部分）

夜の照明に浮きあがったボリショイ劇場（モスクワ）

えてくれた。実に美しいのである。自分の抱いていたイメージは，国家の行事などに使われる大広場，さぞかしそっけないものではないかというものだった。しかしポクロフスキー大聖堂やクレムリンの威容，スパスカヤ・タワー，レーニン廟，リザパラジェーニア教会，百貨店などが取り囲むこの広場の，とりわけ夜景の美しさは特筆に値する。そういえばロシアのエネルギーは豊かだったのだと，おかしなところも感心した。

ロシア正教会といえばあのネギ坊主を頂いた尖塔がなじみ深い。ロシア各地の至る所にこれが見られる。金色に光るのもあれば，複雑な模様と色彩に飾られたものもある。しかしなべていえることは，その建物とのバランスにおいて，これらは例外なく美しい。実物に接したときの存在感に感動する。ワシリー寺院もノヴォジェヴィチ修道院も同様，これらの多くが世界遺産に指定されているのも素直に納得できるであろう。

もちろん赤の広場だけではない。夜間の照明に浮き上がったボリショイ劇場の美しさをどう表現したものであろう。わが東京の「文化会館」などは，むしろ「非文化会館」と改名すべきではと思わされてしまう。経済大国を長く自称した日本を代表するコンサートホール，オペラハウスがこれかと無念だ。東京オリンピックと叫ぶより，上野の森に本格的なオペラハウスをつくりなおす方が先ではないか。

東京とモスクワの歴史を比較すると，モスクワの方が300年ほど先を行っている。双方を比べると，全体が持つ雰囲気，歴史が醸し出す美しさ，

あるいは伝統という名の貫禄など，どうしてもモスクワの方に軍配が上がりそうである。日本の文化が「女房と畳は新しい方がいい」などと言いつつ，木造家屋建築が多いこともあって一般的には古いものを大切にしてこなかったし，特に東京は戦災で多くを失った。京都における街並み景観の乱雑さ，無頓着も同様である。よその畑は緑に見えるというが，モスクワ市街の美しさは想定外というか，舌を巻く思いだった。

ソ連からロシアへの価値観変化

反プーチンのメッセージをコンサートで歌って，Pussy Riot という女性バンドが逮捕されたという報道が日本でもあった。なんという度胸の命名か。これ自体がもし日本で，日本語でなされたら大騒ぎ（どころかまったく無視されてしまうかな）であろう。こんなニュースの一端からも，ロシアの一般的な人たちは，ソ連時代から今に至る社会体制の変化をどう感じているのか，興味があった。ロシア革命以後ざっと100年続いた共産主義から，資本主義への変換はさぞ大事であったに違いない。

現代ロシアについて書かれたものから引用する。

> 2006年10月 7 日，アンナ・ポリトコフスカヤが射殺された。隔週刊誌『ノーヴァヤ・ガゼータ（新しい新聞）』の評論員で，チェチェン戦争で苦しむ人びとの，生と死を伝えてきたジャーナリストである。まだ48歳の，あまりにも惜しまれる途絶だった。絶えることのない哀悼の献花は，モスクワの秋を，深い紅に染めた。
>
> ――昨今のロシアでは，ジャーナリストの暗殺が続いた。2009年 2 月の報道では，1993年以降のジャーナリストの犠牲者は309人に及ぶ。それは，ソ連崩壊とロシアの民主化によって可能になったはずの言論の自由が，テロルによって消し去られてゆく事態だといえる。
>
> ――誰も，警察に厳正な捜査などもとめない。誰も，裁判所に法の正義などもとめない。ソヴェト体制下と同じく，司法に独立性はなく，プーチニズムの体制の腐敗した機関になぞ，何を求めても無駄だからである。ジャーナリスト暗殺事件がそうであるように，事実は明らかにされたためしがない。
>
> ――米田綱路『モスクワの孤独』現代書院

モスクワ滞在中ずっと運転手を務めてくれたゲンナジーに「いまのロシアと，ソ連時代とは，何がどう違っているのか」と尋ねると「自由になった。仕事も自由に選べる」という即答。マイナス面は「安定がない」。お金を稼ぐストレスがたいへんで昔の方がよかったと，ふだんの冗談好きにしてはとても生真面目な表情である。「住居もタダ，子供たちの教育もタダだったしね。子供たちのサマーキャンプだって費用の95％は国が払った。子供は昔の方がずっといきいきしていた。いまは子供たちにとっても厳しい時代さ。若いとき軍隊でチェコに派遣されずいぶん苦労もした。でも，今では自由というが，先がどうなるかわからない不安定さはたいへんだよ」と，たんたんとした口調だ。昔は工場に勤務していたが，現場で働く者の給料は上の方のデスクワーク連中よりずっとよかった，とも。「自分の友達は皆そう言っている」と，ソ連時代へのノスタルジーをごくふつうの口調で語った。

だからこんな政治風刺の小咄，アネクドートがでてくる。「マルクスが生き返り国営テレビで言った。『万国の労働者諸君，許してくれ』」。（『世界の歴史と文化・ロシア』）

そういえば，1848年に刊行された『共産党宣言』にこんなことが書かれている。

ブルジョア階級は「人間の値打ちを交換価値に

変えてしまい，お墨付きで許されて立派に自分のものとなっている無数の自由を，ただひとつの，良心をもたない商業の自由と取り代えてしまった。一言でいえば，かれらは，宗教的な，また政治的な幻影で包んだ搾取を，あからさまな，恥知らずな，直接的な，ひからびた搾取と取り換えたのであった」と。ゲンナジーの思いは20世紀の歴史を一回転してしまったのだが，さりとて資本主義も先が明るいとは言いにくい。

モスクワ大学の学生ポーニャの意見は手厳しかった。いまのロシアは泥棒たちが牛耳っているから，しばらくはどうしようもない。大人たちのまともな思想を持っている人たちはすでにみな国外に逃れた。だから自分たち若い世代がこれから頑張らないといけない。それを思うとしんどいけど，この国はまだまだ可能性が高いと思う，とけなげである。振り返って今の日本の学生はどうか。この半世紀の間に，日本は何がどう変わったのか。

米田さんは同書のあとがきに，「政治権力が隠したいテーマを追求する言論や報道，表現の自由は，脅かされ続けて久しい。と同時に自由を脅かされていると感じない人びとにとっては，問題の所在すらわからないという現実が厳然としてある。同じ社会で同時代を生きながら意識の隔絶や断絶は架橋しがたいほどに広く，また深い」と書いている。ゲンナジーとポーニャはどうか。うわべだけではわからない深い断絶があるのだろうか。あるいは日本においても，多くの人々に問題の所在すらわからないという現実などないのかどうか。他人事と思えない状況が深化しているのではないか。

「誰もまともな政治家など求めない。誰もまともなマスコミなど求めない」というところまで日本の政治社会は追い込まれている。それとも，これほど愚劣な政治を眺めながら，世界でもまれな安全安心社会を維持していられる国民のユニークさのほうを誇るべきなのだろうか。世界平均からすると，客観的には日本の社会的安定度は群を抜いている。おそらくは悲観的に日本をとらえるより楽観的に捉える方が，前向きなエネルギーを引き出しやすいに違いない。

日ロ両国の観光マーケティング

あと１年と少々でソチ五輪である。『地球の歩き方』にはクラスノダールやソチのことなど１行も紹介されてはいない。冬季ではあるものの，ロシアで一番の観光地であり，ロシアのパラダイスという黒海沿岸を日本に売り込むまたとないチャンスがやってくる。あらゆる機会をとらえ，ロシアは日本への広報活動を最大化させてもらいたい。同じことは日本側にも言えることである。幸いにも，ロシアのとくに若い人々の間では，日本に対する関心が非常に高いし，しかも好意的なのである。ここを逃してはならない。お互いに「安・近・短」という商品提供は可能だし，四季や，目的に合わせた多彩な商品開発は十分できるだろう。日本の価格的な多様性も，南北に広がる地理的特性もまた面白い。ロシアの観光需要はむしろ長期・高額・遠距離とも聞いた。だとするならなおさら日本にとって好都合である。若いロシア人たちにはせめて何か月か滞在してもらえるような工夫がいる。小笠原にも，沖縄にも，足をのばしてもらえるようにしよう。

双方がまず新聞，テレビ，雑誌などによる広報で注意を引きあうことが重要である。政府観光局はお互いの限定された予算を，これに集中させるべきだろう。どこまで広報活動によるメディア露出度を高め，好感度を獲得できるか。そして今いる一人ひとりの訪問者にどれだけ満足してもらうか。インターネットでは「Search」に耐えうる，せめても英語情報の完備を。そして無料のプロモーションを可能にする満足度最大化の努力を。そ

してその満足度を「Share」させるべく，お客みずからの発信により情報を広げてもらうこと。冒頭で紹介したような映画による両国の文化紹介だって，意図的に機会をふやしていかなくてはならない。それが政府観光局の仕事である。お互いが親しみやすい環境を，多面的な角度から増やしていきたい。そのためにロシア得意のクラシック音楽やバレエ，文学も，もっともっと動員すればいい。

モスクワの日本センターに，日本の外務省がつくったポスターが何枚も掲示されていた。富士山と桜と新幹線のおなじみパターンには，SHINKANSEN と大書されている。とくにキャッチフレーズはない。別のポスターにはなんと Amazing Japan とあった。国家の観光宣伝ポスターが「盗用」を行っている。観光庁というれっきとした機関があり，そのなかには JNTO という対外マーケティング専門機関まであるのに，なぜ外務省がこんなシロウト丸出しのポスターによる宣伝活動に手を出しているのだろう。とくに Amazing に至っては国辱ものである。これが外務省みずからの手により世界中に貼りだされているのかと思うと，身が震える。

レーニン像（モスクワ）

よく知られているようにこの文言はタイがここ何年も国の国際宣伝用に使用してきた。しかもその評価はすこぶる高く，Amazing Thailand といえば国際的に観光関係者のあいだで知らないものはいない。それを恥ずかしげもなく堂々使える神経を疑う。個別の商品広告やブランド戦略に同様なことが起こったら，もちろん告訴・裁判ものである。こういうことが平気でまかり通る日本の官僚組織というか，恥も臆面もないお手軽な観光に関する意識のレベル，あるいはいい加減な役人の発想にあきれるばかりである。タイの観光関係者に申し訳ないし恥ずかしい。観光面におけるブランド構築，イメージづくりの重要性をロシア各地で語ってきたが，わが国においてこそその基本戦略もデザインも描かれてはいないし，省庁間あるいは予算の使い方ひとつ，こんなレベルに低迷したままである。

1970年代にヒットした国鉄（現 JR）の広告に Discover Japan があった。これも実は盗作である。それより前にアメリカ商務省観光局が Discover America という世界的なキャンペーンを打っていたのである。当時の国鉄ははまだ現在でいう国交省の管轄下にあったから，これだって当時の役人連中の「監督不行き届き」といえなくはない。観光だから，こんなことが平気でまかり通っている。

さて，ロシアと韓国の間では2013年に，30日間の査証免除協定が発効するという。韓国の訪ロ人数はすでに9万人を超えている。日本とロシア間の話題といえば，北方領土，天然ガスのパイプラインといったあたりで，観光についての話題はほとんどない。これではおたがいあまりにもったいなさ過ぎである。せめて両国同士，学生に対する査証免除くらいは行いながら，将来的な友好関係の確立に向け，できる限りのアイデアを出し合うべきではないか。中国・韓国に対してはある程度隣国という意識がある。しかしロシアもまた隣国

である。UNWTO は“Tourism is a passport to peace”とうたっている。日ロ両国はまずおたがいの査証免除から始めたらどうだろう。

おわりに

ロシア文学や芸術に対する評価も依然高いものがある。先の『モスクワの孤独』のなかで米田さんは「（そんなロシアの政治体制下では）文学だけが，社会と人間の真実を伝える表現回路だった。それゆえ文学は，評論となり，ジャーナリズムとなり，哲学となって，人間存在に迫る独特の表現を生み出した。十九世紀ロシアの革命家たちが，同時に文芸評論家であり作家，ジャーナリストであり，哲学者であったのも，故なきことではない。彼らは『真実を言う者』，すなわちロシア・インテリゲンツィアの系譜を作ったのである」と，先のポリトコフスカヤを称え，1993年以降暗殺されたジャーナリストが300人以上にのぼるというプーチン体制に厳しい批判を浴びせている。しかし同書のあとがきには，「そもそも日本のメディアに，何か本質的なことを批評し，批判を持続してゆくだけの姿勢や問題意識があるのか。そんな疑念を抱きながら感じるのは，やはり問題は遠いところにではなく，足元にあるということだった」と，みずからについても甘くない。

ソ連崩壊後，とめどなく国がばらけていく恐怖をロシアは味わってきたであろう。その点を差し引いたにせよ，ロシアの「民主化」は急務である。寒い，冷たい国のイメージは政治と無縁ではない。もうひとつアネクドートを。「各共和国に広がる独立宣言。州，市，町も収拾つかず，家庭にまで。最後に妻が……」（『世界の歴史と文化・ロシア』より）

先にも引用したトニー・ジャットは『ヨーロッパ戦後史』下巻において，ゴルバチョフが始めたグラスノスチと，それに続く歴史的変化をみごとなまでに描写してくれた。冷戦構造終焉はわずか４半世紀ほど前のことである。日本にいたのではわからない，あるいは思考がとても及ばなかったことが手に取るように理解できる。東西の冷戦，ソ連の自壊，東欧の変容，ロシアの再出発。かれの筆致はほとんど手に汗握る歴史ノンフィクションである。あるいは Narrative だと言っていいかもしれない。

空から見るシベリアの山々

ガンジーは七つの社会的大罪のひとつに「原則なき政治」を挙げている。原発問題に限らず，液状化した日本の政治を見ていると，日ロ両国がともに今後越えて行かねばならぬハードルの高さに，いささか気がなえないではない。いや日本の政治は昔からこんなだったという向きがあるかもしれない。「国の民度を超える政治家も政治もない」というシニカルな声も聞こえてきそうである。

しかし少なくとも観光という面からの両国には，自然，歴史，文化，産業，民俗，そのほか，限りない魅力が満ちている。その気になりさえすれば，両国の交流人口は飛躍的に伸ばすことができる。もちろんそのためには，あらたなイメージ戦略にもとづくマーケティング活動が不可欠である。先にも述べたとおり，四季それぞれの商品開発や，LCC を含む航空路の利便性も高める必要があろう。ともかく現状のままではあまりにもったいな

い。わずかな努力で宝の持ち腐れ状態からロシアも日本も脱することができるのにと，今回の旅行でしみじみ感じた。

あらゆる面から，ロシアのポテンシャルは高い。あたらしい政治と経済の体制をつくりかえてから，わずか20年でここまでの変化である。30年の一世代交代まであと10年。もしかするとこの国が持つ共産主義という20世紀の特異な歴史経験が，混迷を深めながら「持続不可能性に気づきつつある資本主義」とその先へ，あるいは何かしらの希望をもたらしてくれるかもしれない。「真の文明は山を荒らさず，川を荒らさず，村を破らず，人を殺さざるべし」と，かの田中正造は喝破した。資本主義にナイーブなこの国によく噛みしめてもらいたい寸言だし，現代の日本に対してもまたしかりである。

繰り返しになってしまうのだが，これだけの人と自然，美しい街々，食のレベルの高さ，歴史文化や大きな国土などを見るにつけ，依然としてロシアは，端倪すべからざる可能性と魅力に満ちた国だと確信する。政治や戦争が，これ以上それを遮ることの無いように，祈らずにはいられない。そして，この国の進化も日本と同様，とくに若い人たちと女性たちのエネルギーに大きく依存するような気がする。

最後にロシアの今日を垣間見る機会を与えてくれた，モスクワの日本センターの皆さんと関係者に，深甚な謝意を記させていただく。

（2012年12月）